生徒会の一存＋ａ

レイチェル＝アルカード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生徒会の一存＋ａ

【Ｎコード】
Ｎ６７９０Ｒ

【作者名】
レイチェル＝アルカード

【あらすじ】
あの生徒会の一存の世界にオリキャラを加えた物語です。

※作者はかなりの初心者＋駄文＋気まぐれ更新の三つの要素で構成されています

プロローグ（前書き）

初投稿です

プロローグ

ルール１　神の存在を受け入れろ

ルール２　彼らに直接触れてはいけない

ルール３　友達の友達は我ら。それが干渉限界

ルール４　《企業》の意向は何よりも優先される

ルール５　《スタッフ》は、個人の思想を持ち込むなかれ

ルール６　情報の漏洩は最大にして最悪の禁忌である

ルール７　我らが騙すのはヒトではなく神であることを忘れてはならない

ルール８　このプロジェクトに道徳心は必要ない。全ては《企業》の利益のために

ルール９　性質上、《学園》の《保守》は最大の命題である

追加ルール１　今年の生徒会には気をつけろ

追加ルール２　特に雨宮詩音には最大の注意を払うように

プロローグ（後書き）

ゆっくり構成していくのでこれからもよろしくお願いします

主人公設定（前書き）

主人公設定です

主人公設定

〜主人公設定〜

・名前　雨宮（アマミヤ）　詩音（シオン）

・性別　男

・所属　二年Ｂ組

・見た目　ペルソナ３の主人公をかなり幼くして、髪を長くしたような感じ

かなりの童顔で結構気にしている

・好きな人、物

師匠が作った料理、本、生徒会メンバー、甘いもの

・嫌いな人、物

事件、苦いもの、会長の暴走

・性格　基本的にのんびりしているが、やるときはやるタイプ（本人談）

《正義の味方》という存在に憧れていて、いつか自分も他人（ヒト）を救えたらいいなと思っていた

しかし小さいころに深夏と真冬が誘拐されかけたために、たった一人の正義の味方になることを決めた

運動は普通より多少上で、勉強がかなりできる

生徒会選挙では同票４位だったため、特別に会計補佐として生徒会に入っている

生徒会メンバーの中で一番まともで会長の暴走の一番の被害者

ただし、ある条件で暴走する

～原作との違い～

・まず、原作の主人公である杉崎鍵と高校1年の時からの親友がオリ主

・小さいころ、深夏と真冬が誘拐されかけている

・生徒会に会計補佐という仕事が増えた

主人公設定（後書き）

これからもよろしくお願いいたします

第1話～駄弁る生徒会～？（前書き）

連続投稿です

第1話～駄弁る生徒会～？

～ｓｉｄｅ詩音～

「世の中がつまらないんじゃないの。貴方がつまらない人間になったのよっ！」

いつもの如く会長がどこで聞いたのかわからない名言を胸をはって語っていた

ふと鍵の方向を見るとどうやら感銘を受けているようだ

少し昔のことを振り返っていると鍵が

「じゃ、童貞もそんなに悪くないってことですか？」

『「ぶっ！」』

つい、お茶を吹いてしまった僕は悪くないはず

会長は涙目になってしまっている

『鍵、何で今の言葉からそんな答えになるのさ？』

「詩音の言う通りよ」

会長もそう思っているようだ

「甘いぞ詩音、会長。俺の思考回路は基本、まずはそっち方面に直

結します！」

そうだった。鍵はそういうやつだった

「何を誇らしげに！杉崎はもうちょっと副会長としての自覚をねぇ……」

「ありますよ、自覚。この生徒会は俺のハーレムだという自覚なら充分――」

「ごめん。副会長の自覚はいいから、まずはそっちの自覚を捨てることから始めようね」

『それにいまの言葉を聞くと僕もハーレムに入ってるけど？』

さすがにＢＬは勘弁して欲しい

鍵は何かニヤニヤしている。少し怖い。

「会長ぉ」

「なによ」

会長は吹いてしまった茶を拭いたティッシュを丸め、生徒会室隅のゴミ箱にシュートしようとしている。

そんな会長を見ながら、鍵が机に肘をつけたまま、突然告げた

「好きです。付き合って下さい」

「にゃわっ！」

見事、ティッシュの塊はゴミ箱とは反対の方向に飛んでいった
会長がまた涙目になってしまっている
「杉崎は、どうしてそぉ軽薄に告白ができるのよ」
「本気だからです」
『「嘘だ！」』
「『ひ〇らし』ネタは微妙に古いですよ、会長。あと便乗するな詩音」
『えっ』
「えっ、じゃねぇよ！」
「杉崎、この生徒会に初めて顔出した時の、第一声を忘れたとは言わせないわよ！」
「なんでしたっけ？ええと……『俺に構わず先に行け！』でしたっけ」
「初っ端からどんな状況なのよ生徒会！違うでしょ！」
『そうだよ。たしか『俺がガ〇ダムだ！』じゃない？』
「いや、『ただの人間には興味はありません。宇宙人、未来人――』」

「危険よ二人とも！いろんな意味で！」

「大丈夫です。原作派ですから」

『僕も第二期派ですから大丈夫です』

「なんの保証！？あとアニメの出来は神だよ杉崎！
それに私はＳｅ○ｄ派だから！」

……会長も見てたんだ、ガ○ダム。
なんか意外

「皆好きです。超好きです。皆付き合って。絶対幸せにしてやるから」

ああ、確かに言ってたなぁ

「そうよ！あの時点で、この生徒に貴方のいいかげんさは知れ渡ってるのよ！誰でもいいから付き合えって堂々と言う人間に、誰がなびくっていうの！」

『確かに』

昔はあんなに堅物だったのになんでこんなのになってしまったんだろう？
ふと、昔のことを思い出していると鍵の変わりようになんだか泣けてきた

そうこうしているうちに生徒会室の扉が開いた

「キー君。あんまりアカちゃんイジめちゃだめよ。あと、シー君もキー君を止めなくちゃ」

『いや、昔の鍵のことを思い出していたらいつの間にかだったので』

今、入って来たのは、会長と同じ三年の、書記である、知弦さん

ちなみに僕がシー君と呼ばれているのは、そのまま詩音の詩を伸ばしただけなんだけどね

知弦さんは会長とは正反対の人間で、長身、出るとこは出て締まるとこは締まっている。

黒い髪をロングにしていて見惚れてしまうほどの大人の魅力を振り撒いている（鍵談）

「いじめてなんかいませんよぉ。だだ、辱しめていただけです」

「ある意味余計に悪質じゃない」

「大丈夫ですよ。同意の上でですから」

いつ同意したのだろう？

そう考えていると会長がいじけていた。

鍵は知弦さんと話しているし、会長を慰めておくことにしよう

『まぁまぁ、会長たまにはスルーされることもありますって』

「そっ、そうよね」

会長は元気になったみたいだ。よかった

そうしていると、会長が勝手に知弦さんのスナック菓子に手を伸ばしていた。

それに気付いた鍵が会長に忠告していた

「太りますよ」

「うぐっ。……だ、大丈夫。栄養を、背と胸に回すんだもん！」

『いいですけどね。太っても知りませんから』

「だ、大丈夫！私ほら、太りにくいから」

「胸と背も発達しにくいですがね」

「……ええい、はむ！」

あらら、食べちゃったよ

「……次の問題の回答は……よし、『メタボリックシンドローム』、と」

「……」

知弦さんがノートに目を向けたままで、酷いことを言っていた。

わざとだな絶対

そんな知弦さんのどSさに震えていると会長が肩を落としていた。

そんなになるなら食べなきゃいいのに

第1話～駄弁る生徒会～？（後書き）

出来れば感想お願いします

第1話～駄弁る生徒会～？（訂正）（前書き）

前回の続きです

第1話～駄弁る生徒会～？（訂正）

～Ｓｉｄｅ詩音～

会長が肩を落としているのを見た鍵が会長の肩に手を置いて

「大丈夫ですよ、会長。もし、もらい手がなくなったら……」

「え？もしかして……太った私でも、好きって言ってくれるの？美少女じゃなくなっても？杉崎……あなた……」

『「もらい手がなくなったら……仕事に、生きて下さい」』

「リアルなアドバイス！？

ていうかなんで詩音もいっしょに言ってるの！？」

『なんとなく……？』

「俺、陰ながら応援しますから！」

「陰からなんだ！私、基本は見捨てられたんだ！太った私に価値はないんだ！」

「まあ、ですから太らないように頑張って下さいっていう、俺なりの叱咤激励ですよ」

「あ～う～」

会長がさらに肩を落としていた

鍵は何か微妙にシリアスな顔になってるし

でも……

「頑張れ、俺のハーレムに留まるために！」

「あ、なんか急に太ってもいいような気がしてきた」

「……」

うん、最後の言葉は完璧にいらないね

鍵が何かにダメージをうけているみたいなので、少し本でも読んで時間を潰そうかな

本を読みはじめてからしばらくたつと、また生徒会室の扉が開き、今度は二人の女子が入って来た

「おっくれましたぁー」

「す、すいません」

対照的な態度で入ってくる二人

前を歩く元気な少女、椎名深夏は鍵と同じ副会長で、さらに僕と鍵のクラスメイトでもある

長い髪をツインテールにしていて、かなり運動神経がいい

快活で爽やかな性格をしているけど、昔のことからいきなり仲良くなったりはできなくなってしまった

何故か知らないけど、僕以外の男子とはあまり仲が良くなく、鍵ともすぐに敵対する傾向がある。

……いつも二人の仲を取り持つ僕の立場になって欲しい

そして深夏の後ろから僕達に頭を下げつつ、入ってくる少女が、椎名真冬ちゃん。

深夏の妹で一年。僕が補佐を勤める会計という役職についているけど……あまり関係ない

真冬ちゃんは深夏とは正反対な性格をしていて、儚げで男性が苦手（最初は僕も避けられた）という少女だ

二人とも僕の幼なじみで……守りたい人だから

改めてあの時の誓いを思い出しているとずいぶんと話が進んでいたようだ

……深夏がなんか凄く怒っていた。

これはいったい？

「ヤキモチじゃねーって！

お前と付き合うぐらいだったら詩音のほうがまだましだ！」

……”まだ”なんだ。
かなりショックだなぁ。
鍵もこっちを敵意の眼差しで見ないで、泣けてくるから。
隅っこでじめじめと泣いていると鍵と深夏の言い合いは終わり、鍵は会長と話しているみたいだ
とりあえず席に戻り話に参加することに
「キー君。私は別に貴方のこと嫌いじゃないけど、もうちょっと誠実に立ち回ったほうが利口だと思うわよ？
ハーレムを作るにしても、それを宣言しちゃうんじゃなくて、むしろ誠実さで落として行くのが、王道というものじゃないかしら」
『確かに知弦さんの言うとおりだと思うよ鍵。
もう少ししっかりしたら、別に顔が悪いわけじゃないし、多分そっちのほうがいいと思うよ？』
「う、ううむ……。知弦さんの意見も一理ありますけど……。しかし、どう取り繕ってもこれが、俺ですから！この欲望に満ちた姿が、本当の俺ですからっ！自分、不器用ッスから！そして、性欲に忠実ッスから！」
『「芯からこってり腐りきってるな（ね）お前（鍵）」』
「詩音までっ！？」
さすがに今のは弁解の余地はないな。
救いようのないってこのことかなぁ？

「ふふふ……これから次々と、生徒会メンバーは俺の魔の手に落ちていくのさ……」

ほう、今のは聞き捨てならないなぁ

「魔の手とか自分で言い始めちゃいましたね……」

『ならば、僕が君を倒す！！』

「えっ、ちょい詩音待て！」

『問答無用！死ね、外道！』

「ちょっとぉ！？マジっ、止め……ギィヤァァァァァァァァ……」

「さすが詩音だなっ！容赦しないなぁ」

『ふっ、悪は滅びた』

良いことしたらずいぶんと気が晴れた。
また本でも読んでゆっくりしよう

本に集中し過ぎて周りの会話についていけない

少し焦っていると鍵が突然立ち上がった！

「俺は美少女ハーレムを作る！」

……ここまでくるとある意味清々しいね。
でも……
『これが鍵の良いとこなのかもねぇ？』
なんだかんだでやり遂げてしまうこいつなら……
『頑張れ』
誰にも聞こえないようにそっと呟いた

『ほら、これで最後だよ』
「すまねぇ、詩音。いつも手伝ってもらって」
放課後の、たった二人しかいない生徒会室で雑務をこなしている僕と鍵
『そんなこと気にするなら早く終わらせない？疲れてるし』
「そうだな！」
……

私立碧陽学園生徒会。

そこでは毎日つまらない人間達が楽しい会話を繰り広げている。

～Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ詩音～

第1話～駄弁る生徒会～？（訂正）（後書き）

お気に入りに入れてくださったかた、ありがとうございます

これからも応援していただけると幸いです

第2話～放送する生徒会～？（前書き）

連続投稿です

第2話～放送する生徒会～？

～ｓｉｄｅ詩音～

「他人との触れ合いやぶつかり合いがあってこそ、人は成長していくのよ！」

会長は、いつものように小さな胸を張って何かの受け売りを語っていた。

「なんですか？それ」

鍵が会長に聞き返す。

すると会長は、ホワイトボードに議題を記し、「これよ！」と、バンッとボードを叩いた

『ええと……ラジオ放送？』

ホワイトボードにはそう記されていたけど……しかしいったい何故にラジオ放送？

周りを見渡すと会長を除いた全員がわからないようだった

「そう！これから生徒会で、ラジオをやろうと思うの！」

「ら、ラジオって……」

これは真冬ちゃんには厳しいかもしれないねぇ

……正直、関わりたくない。
あの会長が一回やっただけで満足するとは思えない
そんな僕の考えとは裏腹にすでに配線関係等は終わってしまっていた。
後で放送部に謝りにいこう、絶対
「か、完全に準備されちゃってます……」
……ドンマイ、真冬ちゃん。
もう皆諦めたから
ただ一人、テンションが高い会長が口を開く
「ほら、最近は声優さんのラジオも増えたじゃない。美少女がたくさん集まって喋っていれば、皆、大満足のはずよ」
その自信はどこから来る！？
『会長、声優さんやパーソナリティー、そしてリスナーを舐めてるでしょ？』
さすがにツッコム。けど、会長は聞く耳を持たない
「可愛い声でキャピキャピ喋りあっていれば、男性リスナーなんてコロリと騙されるはずよ」
「謝れ！俺以外の男性に謝れ！」
『鍵……』

どうやら、僕の親友はもう駄目らしい

「杉崎は騙されるんだ……。まあ、それに、六人もいれば会話が尽きることもないでしょう。大丈夫大丈夫。いつも通りに喋ればいいんだから」

『「いつも通りって（といっても）……」』

「あ、杉崎はあんまり喋らないでね。杉崎は、存在自体が放送コードにひっかかっているから」

「ひでぇ！」

さすがに酷く……ないね、うん。

鍵が喋ると本当にひっかかってそうだから

そうこうしている間に、セッティングは完了してしまったらしい。

ここまで来たなら、もう潔くラジオをやってしまおう

周りの皆ももうやる気らしい

……さて、失敗しないように頑張らせて貰おうかな？

第2話～放送する生徒会～？（後書き）

感想いただけると幸いです

第2話～放送する生徒会～？（前書き）

少し遅れましたが投稿です

今回で第二話が終わります

第2話～放送する生徒会～？

～Ｓｉｄｅ詩音～

ＯＮ　ＡＩＲ

会長「桜野くりむの！オールナイト全時空！」

杉崎、詩音『「放送範囲でけぇ！」』

♪オープニングＢＧＭ♪

会長「さあ、始まりました。桜野くりむのオールナイト全時空」

知弦「夜じゃないけどね」

会長「この番組は、富士見書房の一社提供でお送りします」

深夏「どうしたんだ、富士見書房……。無駄な投資も甚だしいな、おい……」

会長「まあ、ギャラもゼロ円だし、機材も放送枠にもお金かかってないから、スポンサーにしてもらうことは何もないんだけどね」

真冬「じゃあなんで提供を読んだんですか……」

会長「それっぽいじゃない。うん、今のところ、とてもラジオっぽ

いわ」

詩音『ラジオっぽいでいいんだ……。もうラジオじゃなくていいんじゃ……』

会長「そこ、そんなこと言わない！」

詩音『……もう……いいや……』

深夏「諦めろ…詩音…」

会長「こら、詩音！そんなテンションじゃ駄目よ！」

真冬「そ、そうでしょうか……」

会長「うん。男子リスナーなんて、そんなものだよ」

杉崎「こらこらこらこら！なんでリスナーを見下げた発言すんの！？生徒に喧嘩売ってんの！？」

会長「パーソナリティーあっての、リスナーじゃない」

杉崎「リスナーあっての、パーソナリティーだ！」

深夏、詩音『「おお、鍵が物凄く真っ当な発言してる！すげぇ！ラジオ効果、すげぇ！」』

会長「……そうね。私が間違ってたわ、杉崎」

杉崎「分かればいいんですよ、分かれば……」

会長「そうよね。やっぱり、ある程度媚びておいた方が得よね。うん、私、大人」

詩音『だからそういう発言がアウトなんだって言ってんでしょうがあぁぁぁぁぁ！』

知弦「シー君が叫ぶってかなり珍しいんじゃあない？」

会長「お便りのコーナー」

杉崎、詩音『「無視！？ラジオなのに、言葉のキャッチボール拒否！？」』

知弦「それがアカちゃんクオリティ」

杉崎「なんで貴女は要所要所でしか喋らないんですか！もっと舵取りして下さいよ！」

知弦「……」

杉崎「ラジオで無言はやめましょうよ！」

会長「さて、一通目のお便り」

杉崎「進行重視かっ！会話の流れ無視ですかっ！」

詩音『ごめん、少しだけ休ませて。胃が痛くなってきたから……』

杉崎「頼む！詩音！お前がいなくなったら、俺の負担が半端ないことに！」

会長「じゃあ改めて、『生徒会の皆さん、こんばっぱー！』はい、こんばっぱー！」

杉崎以外『こんばっぱー！』

杉崎「俺以外の共通認識！？っていうかなんで詩音も！？」

詩音『……なんか…悟った……』

会長以外『お疲れ様ですっ！！』

会長「……変な詩音ね。まあ、いいわ、『オールナイト全時空、いつも、楽しく聴いております』ありがとー」

杉崎「嘘だ！第一回放送のはずだ、これは！」

会長「時系列なんて、些末な問題よ、杉崎。このラジオにおいてはね」

詩音『……あぁ』フラッ、バタ

深夏「お、おい！詩音！？大丈夫か！？」

詩音『……キュ～～……』

会長「ん、詩音、どうしたの？全くラジオ放送中に倒れるなんて……」

詩音『っは！いったい何が？』

会長「さて、聴いていただきましたのは、絶賛発売中のシングル《妹はもう帰ってこない》でした。デビューシングルの、《弟は白骨化していた》も合わせてよろしくねー」

杉崎「アンタの過去に一体何があったんだ！」

詩音『（……もう少しだけ、気絶したふりしよう、関わりたくないし。頑張れ、鍵。僕の胃のために！）』

詩音『（……さすがにもう復活しないと、空気になりそうだな）……ううん、あれ？何で倒れてたんだ？』

深夏「お、やっと詩音が帰ってきたぞ！」

会長「さ、さて、じゃあ、次のコーナー！《杉崎鍵の『殴るなら俺を殴れ！』》」

杉崎「なんですかそのコーナー！」

会長「このコーナーは、校内でもし誰かを殴りそうになるほどカッとしてしまったら、とりあえず、杉崎を標的にして発散しましょう、というコーナーです」

杉崎「俺の人権は！？」

会長「生徒のいざこざを解決するのも、生徒会の仕事。というわけで、今日も揉め事がありましたら、二年Ｂ組の杉崎までご連絡を――」

杉崎「するな――――――――！っていうか詩音は笑顔でサムズアップするな！」

詩音『（……僕の胃のために……）』グッ！

会長「仕方ないわね……。希望者がいないようだし、今日はこのコーナーは飛ばすわ」

杉崎「なんで俺の担当だけ、そんなコーナーなんスか……」

詩音『もう……いいよね……ゴールしても、いいよね……』

深夏「お、おい！どこかで似たようなセリフ聞いたことあるぞ！っていうかゴールってどこだよ！」

知弦「シー君！しっかりしなさい！」

真冬「あ、あのぅ。会長さんたち放っておいていいんですか？」

知弦「そうね。深夏は少しシー君のこと、お願いね？」

深夏「お、おう」

詩音『ああ、なんか川が見える……』

深夏「っちょ！しっかりしろ、詩音！」

少女治療中……

会長「こほん。では、いきましょう。匿名希望さんからの五・七・五」

『燃えちまえ　メラメラ燃えろ　杉崎家』

会長「……素晴らしい詩ですね。情景が目に浮かぶようです」

杉崎「……」

会長「？えっと……杉崎？私が言うのもなんだけど……ツッコマないの？」

杉崎「いえ……。……。すみません。リアルに身の危険を感じて、テンションが上がりにくいです」

会長「あー……」

深夏「……ちょっと笑いのレベルを超えていたよな、今のは……」

真冬「真冬も、若干引いてしまいました」

詩音『まあ、これも鍵が周りから恨まれるような態度で生徒会にいるから……自業自得……かな？』

杉崎「う、うぅ……。え、ええぇ！構うもんか！ここは俺のハーレムだ！文句あるヤツ、喧嘩なら買うぜ！だから――――」

詩音、会長『「だから？」』

杉崎「火、つけるのだけは勘弁して下さい。すいませんでした」

会長「……杉崎がラジオなのに泣きながら土下座したところで、次のお便りいこうか。これも……ええと、匿名希望みたい。こほん」

『金がない　勢い余って　人さらい』

杉崎「犯人コイツかぁ――――――！」

詩音『？』

会長「え？なに？どういうこと？」

杉崎「いや、だから、さっきの誘拐事件の――。い、いえ、そんなことより、コイツの名前と住所！書いてないんですか！」

会長「それはないけど……追伸で『二万円も要求してやったぜ！』とは書いてあるわ」

杉崎「二万円かよ！安いな、うちの生徒の妹の身代金！なんで両親

用意できねーんだよ！」
会長「私に言われても……。杉崎。世の中には、恵まれない人もたくさんいるんだよ」
深夏「（既に環境に恵まれないヤツがすぐ近くに……）」
詩音『胃薬……買いにいこ……』
杉崎「そ、そうですけど！……なんかこの事件……割と浅い気がしてきました」
会長「そんなの誰もが最初から気付いているわよ。まあ、うちはラジオを続けましょう」
杉崎「……収録中っていうか放送中に決着つきそうッスね……誘拐事件」
会長「では、残った二枚は同時に紹介したいと思います。こほん」
『真面目にさ　仕事をしろよ　生徒会』
『大丈夫？　早く医者に　行ってきな？』
杉崎「一般生徒の素直な反応キタ――――」
詩音『グスッ……もう1つのお便り送ってくれた方ありがとうございます。さっそく病院に行くつもりです』
会長「まったく、詩音のはともかく、失礼しちゃうわよね」
杉崎「いえ……俺が言うのもなんですが、すげぇ気持ち分かります」

深夏「あたしも分かる」

真冬「真冬も分かります」

会長「なによ！やるべきことはちゃんとやってるわよ！」

知弦「やらなくていいことも大量にやっているけどね」

詩音『おかげさまで胃薬のお世話になることに……』

会長「不愉快だわ。このコーナー、終了」

杉崎、詩音『「そういう態度が駄目なんだよ（だと思います）！」』

会長「さて……じゃあ、そろそろ終わりも近いし、フリートークしましょうか」

詩音『や、やっと終わる』

深夏「お、会長さん。メール来てるみたいだぜ」

会長「え？なになに？」

真冬「ええと、ですね。『妹が誘拐されてた件ですけど、無事解決しました』らしいです。良かったですね！」

杉崎「おお……解決したか。良かった良かった」

知弦「……ちっ」

詩音『まあ、無事みたいだし、これでいいじゃあないですか』
会長「最後は、『今日の知弦占い』でお別れです。それでは皆さん、また来週」
詩音『次は出ない、絶対』

♪神秘的なＢＧＭ♪

知弦「では、今日の知弦占いを。
当校の獅子座のあなた。近日中に、『世にも奇妙な物語』っぽい事件に巻き込まれるでしょう。注意して下さい。タ〇リを見かけたら全力で逃げなさい。
ラッキーカラーは《殺意の色》。どす黒いか、真紅か、その辺は各々のイメージに任せます。
ラッキーアイテムは《核》。常に持ち歩けるとなおよし。貴方がメタルギアなら、それも可能となるでしょう。
最後に一言アドバイス

死なないで

以上、知弦占いでした。」
杉崎「怖いですよ！獅子座の人間、今日が終わるまでビクビクですよ！」
知弦「また来週、この時間に会いましょう。……獅子座以外」

杉崎「獅子座ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

♪弟は白骨化していた♪

「今日の放送は大好評だったねー！」

例の番組の放送があった後の放課後。

会長は大満足の顔で、生徒会室でふんぞりかえっている

しかし……僕達二年B組のメンバーは、すっかり、げんなりしていた

会長に聞こえないよう、小声で、二人と会話する

「（おい二人とも……。あれ……好評だったように見えたか？）」

「（いや……少なくともうちのクラスは、ドン引きだったよな）」

『（あの放送の後、病弱な先輩から胃薬渡された……）』

……思い出しただけで胃が痛くなる……

『すみません、少し保健室行ってきます』

「またなの？まあ、いいけど……」

その返事を聞いてすぐに保健室に向かう。
後ろの生徒会室から悲鳴が聞こえたけど、聞こえないふりさせてもらう

あの放送以来、すっかり保健室の常連になってしまった……

～Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ詩音～

第2話～放送する生徒会～？（後書き）

読んでくださったかた、お気に入りにいれてくださったかた、本当にありがとうございます

これからも生徒会の一存＋aをよろしくお願いいたします

おまけ～誓う生徒会～（前書き）

祝５０００ＰＶ突破のため、少し番外編を挟みたいと思います

おまけ～誓う生徒会～

～Ｓｉｄｅ詩音～

「本日の生徒会、終了！」

会長の声で、生徒会の集まりが終わり、皆が家に帰る支度をし始めた

今日の分は昨日で終わらせておいたので、鍵も帰るようだ

帰り道の途中、ふいに深夏がこちらに来て、言った

「なあ、詩音。昔の約束、覚えてるか？」

……忘れる訳がない。

あの時、僕は誓ったから……

『もちろん、忘れてなんかいないよ、あの日のことも、全部……』

～～～～回想～～～～

……あの時はまだ、小学校に入って、まだ少ししかたっていなかっ

た。
僕達の家は結構近くにあり、隣人付き合いっていうほどは近くないけど、よく遊びに行ったりしてた
その日は、外の公園に遊びに行っていた時で、外には雪が積もっていた……
深夏達はもう先に行っているから、少しでも早く行こうと駆け足で公園に向かってた
だけど、公園には誰もいなくって、かなり探してた
『みなつちゃ～ん、まふゆちゃ～ん』
いくら呼び掛けても出てこないから、とてもあわててた。
公園のベンチの上、少し雪が払われているところに、一つの手紙がおいてあった。
いわゆる、脅迫文ってやつだ
そして、それを見て、完全に理解はできなかったけど、深夏達が危ないことに気がついた
一目散に助けに行こうと思って、誘拐先の廃工場に行っていた。
その時、たまたま警察の人が僕の姿を見てなかったら、きっと今、ここにはいない
誘拐犯には軽くあしらわれていたが、必死に抵抗したおかげでひどくぼろぼろだった
そのあと、しばらくして、警察の人達が来た。

その時、満身創痍の僕を見て、「頑張ったね」と褒めてくれたのは未だに忘れられない。
でも、僕はひどく情けない気持ちになった。
だから、その時に誓ったんだ

『みなつちゃん、すこしきいてくれる？』

「なぁにぃ？しおんくん」

『ぼくが……』

「？」

『ぼくがまもるから！もうこわいことにはさせないから』

深夏はその時、とてもビックリしてたね。
でも……

「うん！」

そうだ、この笑顔を守るなら、自分は何でもできる。
そう思える笑顔だった……

～～～回想終了～～～

『うん、あの日から、少しだけ変わったけど、約束は変わらない』
そう、あの時から自分は高校に入ったと同時に独り暮らしを始め、
深夏は真冬ちゃんを守ると言った

『深夏が真冬ちゃんを守るなら、僕は深夏を守るから……』

少し変わったけど、思い変わらない。
師匠のように、すべてを守れるなんてかっこいいことはできない。
だからこそ……

『言ったでしょ？僕はたった一人の正義の味方なんだから』

～Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ詩音～

おまけ～誓う生徒会～（後書き）

これからも生徒会の一存＋aをよろしくお願いいたします

お知らせ（前書き）

※決してエイプリルフールの嘘ではありません。

お知らせ

生徒会の一存＋ａについてですが、現在非常に忙しくて、とてもではないですが、投稿している暇がなくなってしまいました。

そのため、しばらくの間は投稿できません。

暇をみて、投稿していくつもりですが、それも時々になってしまうと思います。

以下文字数稼ぎ

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

お知らせ（後書き）

もし、楽しみにしていたというかた、このようなことになってしまい、本当に申し訳ありませんでした。

これからとアンケート（前書き）

タイトルの通り、アンケートです。

あとがきにアンケートについての締め切りが記入されています。

これからとアンケート

まず、このようなアンケートをとることを、本当に申し訳ありません。

今回は、これからの内容について、次の話になる『更生する生徒会』について、飛ばして、次の話にしてしまうか、否か。です。

理由としては、投稿者的にはこの話はどうしても内容が浮かばず、本文がごちゃごちゃになってしまい、構成が狂ってしまうからです。

そのため

1、飛ばして次の話にしてしまう

2、ごちゃごちゃとか関係なく、更生する生徒会の話を入れる

のどちらかを選んで頂く形になります。

次に、こちらはどちらでも構いませんが、詩音と深夏をそろそろくっつけたいので、そのためのオリジナルの話を入れるかどうか。について、アンケートをとりたいと思います。

こちらについては、くっつけたいタイミング等を指定して頂けたら、出来るだけ実行したいと思います。

最後に、いつも生徒会の一存＋ａを読んでいただき、誠にありがとうございます。

これからも、飽きずに読んで頂けたら幸いです。

これからとアンケート（後書き）

アンケートの締め切りは、４月４日２３時３０分までです。

おまけ～伝える生徒会～（前書き）

予告していた『伝える生徒会』です。
かなりの駄文＋甘さになってしまいました

おまけ～伝える生徒会～

～Ｓｉｄｅ詩音～

『鍵、こっちの書類終わったよ』

「ん、ありがとな、詩音」

残った雑務を片付けおわり、今から帰るところ

時間は午後7時30分に差し掛かる位に遅くなってしまった

これは……しょうがない、とてもじゃないけど今から料理してもバイトに間に合わなくなりそうだな

Ｐｉｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒ

『はい、もしもし。詩音だけど？』

「おう、詩音か？あたしだよ、あたし」

『………詐欺でもするつもりかい？深夏。で、何か用かい？』

「いや、詩音ってこれから帰るところだろ、だからいっしょに帰ろうかなって思って」

『確かにそうだけど………』

あれ？何で深夏はこんなに帰るのが遅いんだ？

「いや、運動部の奴らの練習を手伝っていたらさ、こんなに遅くなってたんだよ」

『……運動部の手伝いはいいけど、深夏の練習はきついんじゃない？』

「そんなことねーよ。じゃ、校門のとこで待ってるからな」

Pi

さて、深夏も待ってくれていることだし、さっさといこうかね

『じゃ、鍵。また明日ね』

「おう、また明日な」

『もしかして、だいぶ待った？』

「いや、そんなことねーよ。ほら、いこうぜ」

そうして、僕はいつもとは“逆方向”の帰り道を進んでいった。

「なぁ、詩音？」

『ん、どうしたの、深夏？』

「いや、少しだけ気になったことがあってさ」

『？』

そう言うと深夏は立ち止まって、こちらをしっかりと見て、言った

「なぁ、なんで詩音はあたしのために、ここまでしてくれるんだ？」

そんなの……

『約束したじゃないか、僕が君を守るって』

「違う！！」

『へっ？』

「確かに、詩音はあたしを守るって言ってくれた。けど、今日みたいなあたしの我が儘まで何でもやろうとするじゃねーか！」

そういえば……確かに

『でも、僕は深夏に傷付いてもらいたくないから！』

いつの間にか、お互いに怒鳴りあっている状態だった

「確かに、あたしだっていやで言ってるわけじゃねーよ。ただ……
…」

『ただ……？』

「ただ…知りたいんだよ。もしかすると詩音も昔の“あいつ”みたいに何かしてくるんじゃないかって怖くて……」

『深夏……』

気付かなかった……常日頃、深夏に対して何かしてあげようとしているのが、こんなに裏目に出るなんて……

『ごめんね、深夏。深夏の気持ちを分かってなくて』

「いや、詩音は悪くねーよ。ただ…教えてくれ、詩音は…なんでここまでしてくれるんだ？」

『僕は……』

なんで僕は深夏を守るって決めたんだ。
僕は……

＞＞＞＞＞みなつちゃん、まってよ～＜＜＜＜＜

＞＞＞＞＞おせーよ、しおん！まふゆ！＜＜＜＜＜

>>>>>おねーちゃん、まって〜<<<<<

そうか、僕は……。

『深夏……』

「何だよ、詩音」

そう

『分かったよ、理由』

僕は……

「そうか」

深夏のことが……

『それはね、僕が』

「？詩音が」

『君のことが好きだったから……かな』

「っ／／／／」

『あれ、これって告白になるのかな？』

「～～～～／／／／」

『深夏？何でそんなに顔赤いの？』

でも、僕はこういう普通のことが好きだったんだよ。
普通に深夏と笑っていられるのが

『返事はしなくていいよ。僕はこういう普通に深夏と笑っていられるのが好きなんだから』

「……ズルイじゃねーか」

『深夏？』

「何で……いつも……」

『？』

「ズルいじゃねーか！自分だけ言い切ったみたいな顔して！」

『み、深夏？どうしたの？』

「あたしだって、昔から、いつも、近くにいてくれた、詩音が好きなんだよ！」

『み、深夏！？いきなりなにを言うのさ／／／／』

「だからさ……返事はいらないなんて言うなよ。だって」

そういうと深夏はこっちに抱きついてきた

「最初っから返事なんて決まってるんだからな」

ふっははははっ！

なんだ、最初っから決まってたんだ！

『ふふふ、そうだね。なら……改めて、もう一度』

『深夏のことが好きです。ずっと隣にいてくれますか？』

「もちろん！！」

「しかし、さっきの告白は、どちらかって言うとプロポーズみたいじゃないか？」

『言わないでよ、恥ずかしいから／／／／』

「ん、もうあたしんちの前まで来てたんだな、じゃあまた明日な、あたしの……彼氏（詩音）！」

『ふふふっ、また明日ね。僕の彼女さん（深夏）』

改めて、時計を確認する

『もう8時51分じゃん、バイトは間に合わないな』

携帯からバイト先に“急ぎ”の用事で行けなくなったと連絡を入れる

『でも、たまにはこういうのも悪くないかな』

～Side　out詩音～

おまけ～伝える生徒会～（後書き）

いつもながらありがとうございます。
今回の話について何かありましたら感想にお願いします

第3話～遊ぶ生徒会～？（前書き）

相変わらずの駄文です

第3話～遊ぶ生徒会～？

Ｓｉｄｅ～詩音～

『深夏、悪いけど先に生徒会に行っといてくれない？
借りてきた本の期限が今日までだから返しに行かないといけないから』

「分かった。でも早く来てくれよ？」

「ん、なんか急に仲良くなったなぁ？二人とも」

僕と深夏が二人で話していると、今までと態度が違ったことに気が付いた鍵が話に入ってきた

『あぁ、鍵は知らなかったっけ』

「いや、まだ真冬しか知らないと思うぞ？」

『それもそっか』

「おい、二人して隠し事か？」

なぜ、真冬ちゃんが知っているかというと、いつもと違う深夏から聞き出したらしい。
まぁ、別に隠すようなことじゃないと思うけどね

『あぁ、実は――――』

「おい、本返しに行かないといけないんじゃねーのか！？
先に生徒会行ってるから早く行ってこい！」

そういうと深夏は鍵を引っ張って行ってしまった。
そんなに恥ずかしいのかな？

まぁ、早く本を返しに行かないといけないのは事実だし……早めに行ってしまおう

『何……これ……？』

生徒会室に入った僕がみたのは、顔が劇画チックになっている生徒会メンバー（会長除く）だった

『みんなして何してるのさ？
異常に空気が重いし』

「あっ、詩音じゃない。遅いわよ！」

『会長、何やってるんですか？』

「見て分からない？トランプよ！トランプ」

確かに……言い方は腹立たしいけど、机の上にはトランプが置いてある。
でも、トランプってこんなに重いゲームあったっけ？
『……まぁ、会議もしないで遊んでた生徒会メンバーは後で怒るとして……結局、何やるんですか？』
「ポーカーらしいわよ」
「俺のターン！ドロー！」
「ちょ、杉崎！？なに勝手にゲーム始めてるの！っていうか、ポーカーってそういうゲームじゃないでしょう！」
「……今のはただの挨拶です。昔、決闘者と書いてデュエリストと呼ばれた俺なりの、流儀です」
「は、はぁ。まぁ……ポーカーやるのはいいけどさ」
鍵がカードを配っている間に、近くに座っていた真冬ちゃんが僕に話してきた
「詩音先輩、すみませんがわざと負けてくれませんか？」
『ん、何でかな？』
「会長さんがトランプでずっと負け続けて、終わらないからです」
『なるほど』

会議は始めようとしたけど、会長が弱すぎてずっとトランプで遊んでたって訳ね

『でも、ポーカーだったら終わるでしょ』

「……少なくとも、あたしは詩音に勝った覚えはねーぞ」

近くで深夏が何か言っている、けど気にしない

全員にカードが配り終わり、それぞれ、手札を変えている。

さて、巧くバラバラにしないと

そこで会長の方を確認すると、全部のカードを捨てていた。

いやいや、それはねーよ！

周りも会長のあまりの行動にフリーズしていた

その後、鍵が会長の捨てた手札を確認すると、とたんに絶望した顔になった

「な……そんな……。まさか……そんなことが許されるのか……神よ」

……そんなに酷いのかな？会長の手札（多少の天然）

その後、僕以外のメンバーも会長の捨てた手札を確認すると、全員がショックを受けていた。

……何でそんなになるのかな？

真冬ちゃんの手札から、会長の捨てたカードがはらりと落ちる。

内容はＡ・Ａ・Ａ・Ｋ・Ｋのフルハウス。

それを全部捨てた！？

「じゃ、オープン！」

会長の宣言と共に、全員がカードを公開する。
ブタ・ブタ・ブタ・ブタ・ブタ・ストレートフラッシュ

「「「「「ちょっと待てーい！！」」」」」

『？』

「や、やるわね。詩音」

「いやいや、お前何一人勝ちしてんの！？真冬ちゃんから聞いてないの？」

『いや、一応会長の後に全部捨てたんだけどねー』

「おい、詩音。一応捨てたカード、見てもいいか？」

『？どうぞ』

それで、会長含む全員が僕の捨てたカードを確認すると、全員がまたフリーズした

まぁ、一発でロイヤルストレートフラッシュがそろうとか、奇跡にも程があるからね

「だからあたしは詩音とポーカーをやりたくないんだよ」

深夏、流石にそれは酷くない？

第3話～遊ぶ生徒会～？（後書き）

詩音は幸運スキルＥＸ持ちです

第3話～遊ぶ生徒会～？（前書き）

今回、詩音がぶっ壊れます

第3話～遊ぶ生徒会～？

Ｓｉｄｅ～詩音～

さて、さっきのポーカーはおいといて

「じゃ、次はなにするー？」

「「「「！？」」」」

……おそらく、一発で飽きたであろう会長を止める方法を考えるのが先だろう。

僕以外の生徒会メンバーはとてもじゃないけど、まともに考えられないだろうからね

「ふ……ふは……ふはははは」

「す、杉崎？」

ついに鍵が壊れた、っていうかどれだけトランプやってたのさ？

「いえ、なんでもありませんよ、会長。いえ……ベルセルク」

「意味分からないよ！ベルセルクじゃないよ、私！」

「ふ……では、修羅と改めさせてもらいましょうか」

「会長か桜野くりむと改めてよ！なんで修羅になったのよ！」

「修羅よ。貴女は、そこまで戦争が好きなのかっ！」

……これは不味い。このままだと、生徒会メンバーの全員が酷い目に遭う！

「好きじゃないよ！？なんでそんな勘違いされているの！？」

「いいでしょう。貴女がそこまで血を望むのならば、我らは喜んで人身御供となりましょうぞ！」

「口調とテンションがまるで理解できないよ！」

「さぁ皆のもの！戦じゃ、戦じゃー！」

「「「おおー」」」

あぁ、これは……

「なんで皆まで！？なんなのこの気持ち悪い状況！」

諦めようか……

『……おお～』

こうして僕達は、長い長い戦いへともつれこんでいくのであった。

これが、後に「クリムゾンの悲劇」と呼ばれる戦争の始まりである

「さて……私達は昨日、あの戦争を、シー君が最後一対一のドローポーカーへ持ち込んでくれたおかげで帰宅できたけど……。今日はどうなるかは……シー君しだいね」

「その詩音がまだ来てないのが不気味でしょうがないですけど……」

『み、皆……』

「し、詩音!?どうしたんだ?そんなに痩せこけて」

『深夏……僕じゃ無理だ……。僕じゃ修羅には勝てないよ……』

ああ、意識が遠退いていく……

「一体何があったんだ!?詩音!」

『気をつけて……修羅はあのあと、三時間……ずっとドローポーカーをやって、僕に勝ったんだけど……』

「「「「けど?」」」」

『その後……「詩音って案外大したことないのね。これなら生徒会メンバー全員に勝てるわ!」って言ってたから……ガクッ』

「詩音……?おい!詩音、しっかりしろ!」

もう……無理……

ん、また生徒会室で気絶したのかな？

「こら、鍵、何するんだ！」

「せ、先輩、苦しいですぅ！」

あれ……？

スギサキクンハミナツとマフユチャンニナニシテルノカナ？

バアイニヨッテハ……ケケケケケケケ

「さぁて、今日も元気にトランプするわよーっ……て」

カイチョウサンガトマドッテイルナ

「え、えーと」

ドウヤラナンテイオウトシテイルノカマヨッテイルミタイダ

「杉崎、さようなら？」

「へ、何言ってるんですか、会長？」

「だ、だって……後ろ」

「？変な会長ですね。別に後ろには何も……」

『ヤア、スギサキクン。ソロソロザンゲノジカンダヨ？』

こっちをみた鍵がフリーズした。

まあ、タダデスムトオモウナヨ

『アンシンシテヨ、スギサキクン。カルクシシヨイタダクダケダカラ……ネ』

「いや、それってほぼ確実に死ぬだろ！」

『モンドウムヨウ！ヒトノカノジョニテヲダシタバツダ！』

「いぎゃぁぁぁぁぁぁ！あと彼女って誰のことだぁぁぁぁぁぁ！」

この光景を見て、他の生徒会メンバーは『詩音を怒らせたら危険』ということを再認識した

こうして、この「クリムゾンの悲劇」は、とある青年……『人類共通の敵の出現』と『とある青年の暴走による、人類共通の敵の消滅』

によって、新たな危険性の確認と共に終結した

この後、実に三百年に亘ってこの『敵』は最低の男として……そしてもう一人の青年は『場合によっては一番危険』な人物として語られていくこととなった

Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～詩音～

おまけ

「ところで、詩音の彼女って……誰？」

「ああ、それってお姉ちゃんのことですよ、会長さん」

「あら、シー君と深夏って付き合ってたの？知らなかったわ」

「ふ、不純異性交遊は駄目だよ、深夏！」

「うう……詩音のばか野郎……」

おわり

第3話～遊ぶ生徒会～？（後書き）

まだ全然駄文なのに、バカテスで小説が書きたくなってしまいました

あと、感想等がありましたら、ぜひ書き込んでください

存在しえないプロローグ（前書き）

今回から「生徒会の二心」に入ります

存在しえないプロローグ

〇《スタッフ》への通達

近頃、諸君らの干渉成果にかんして、《企業》の上層部から疑問の声が上がり始めている。
仕事の性質上、明確な数字として諸君らの功績は測れるものではない。しかし、今期はあまりに《企業》への貢献が見られない。
《ヒューマン・フィールドバック・システム》の異変を指摘する声もあるにはあるが、活動状況を鑑みるに、その可能性は極めて低い。
つまり、言い訳はきかないということだ。
そのため、《スタッフ》の諸君らには、今一度危機感をもって、このプロジェクトにあたってもらいたい。
《学園》の空気に当てられ、気が緩んではいなかったか？
マニュアルに頼りすぎ、柔軟な対応を忘れていなかったか？
自分達の立場や権力を、過信しすぎてはいないか？

子供を侮るな。

諸君らの能力は確かに高い。この日本に君ら以上に人心を掌握する術に長けた精鋭は存在しないだろう
しかし、この年代の未熟な子供の心を完全に把握するというのは、優秀な諸君らだからこそ難しい部分もあるのではなかろうか
そして。

だからこそ、時に、あの生徒会、ひいてはあの“裏切り者”のような輩に後れをとるのではなかろうか。

そこで《企業》は、この度、新たな打開策を導入することを決定し

た。

その打開策とは――――

存在しえないプロローグ（後書き）

これからも生徒会の一存＋aをよろしくお願いいたします

第４話～反省する生徒会～？（訂正）（前書き）

遅れてしまい、誠に申し訳ありませんでした

では、最新話です

第４話～反省する生徒会～？（訂正）

Ｓｉｄｅ～詩音～

「過去の失敗を糧にしてこそ、我々は前に進めるのよ！」

会長さんがいつものように胸を張ってなにかの本の受け売りを偉そうに語っていた

……ホワイトボードには既に、《第一回　生徒会大反省会》と書かれていた

『ん？反省？』

僕の疑問に合わせるように、深夏が「えー」と不満の声をあげた

「反省たって、まだ２ヶ月ほどしか活動してないじゃねえかー」

深夏の言うこともっともだと思う……けど

「そういう生温い考えが、現生徒会を堕落させているのよ！」

「堕落って」

会長さんは止まらないだろうな……

そして、会長さんは深夏から鍵へと視点を変え、再びバンッと机を叩いた

……正直、威圧感の欠片もないんだけどね（笑）

「杉崎なんて反省点だらけじゃない！むしろ、反省点以外が見当たらないじゃない！」

「俺の人格全否定っすか」

「え？どこか肯定するところあるの？」

…鍵のいいとこ、ね……

「や、あるでしょう。俺にだって、いいところ。ねぇ？」

鍵がそう言って周りに尋ねる

しかし、皆あまり顔はしていない

「反省会……すべきかもしれねぇな」

さっきまで、反対していた深夏が、あっさりと賛成へまわった

「うぉぉい！なんだその急な方向転換！」

それに続くように他のメンバーも段々と賛成していっているようだ

「なぁ、詩音！お前はあるよな？俺のいいところ」

鍵が僕に、そう聞いてきた

『うーん、鍵のいいところか……』

いいところ、いいところ……

『うん、あるよ』

「流石詩音だな！ほら、会長、俺にだっていいところあるんですよ」

『でも……』

「ん？」

『それの約２０倍くらい悪いとこもあるね（笑）』

「ちくしょぉぉぉう！」

ハハハッ、鍵の奴、嬉しくて涙を流してるよ

「い、いや、違うと思いますよ？」

あれ？違うの？

「ええい、そうさ！俺は反省点だらけさ！」

鍵が開き直った！

さすがに予想外だったのか、会長さんは目をぱちくりさせている

「しかし、そんなことは俺が生まれた時からの、今更言うまでもない現実！だからこそ、俺に反省を促す事ほど無駄な時間はありません！だったら、今日は俺以外のメンバーが反省すべきでしょう！」

「う……なんか説得力あるわね。自分を全否定しているクセに」
確かに、たまには鍵以外が反省すべきかも知れないけど……
「さしあたっては会長！最高責任者たる貴女が率先して反省すべきでしょう！」
「うっ！」
鍵が会長さんを指差すと、会長さんは少しだけ苦い顔をした
『…まあ、確かに』
「詩音！？」
会長さんは、僕が賛成したことが信じられないようだ
そんなことは知らないようで、鍵はそのまま会長さんに質問をする
「では、会長。まずは、会長自身が、自分の反省点と思うところをあげてみて下さい」
「わ、私の反省点？」
うーん、正直な話、会長さんの反省点なんて、多すぎてすぐに浮かぶ
でも、会長さんだし、もしかしたら「ない」とか言いそうだな……
いやいや、さすがにないｄ……

「ないわね」

う、嘘だ！

「どこまで自分に甘ぇんだこのヤロォ――――――」

「わぁ！杉崎がキレた！急にキレた！理由なくキレる現代の若者、怖い！」

「理由ありまくりだわ！古代の老人でもキレるわ！」

周りを見ても、全員が額に怒りマークを浮かべていた

「えと……なんか皆怒ってる？どうして？あ、ああ、私があまりに完璧人間すぎて、ちょっと嫉妬しちゃったのかなぁ？ごめんね、やっぱり会長に選ばれるくらいだから、私って、欠点とかないんだよねー」

《ピキ、ピキ、ピキ、ピキ》

会長さん……少し調子に乗ってるな？

『カイチョウサン、スコシＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩショウカ？』

「し、詩音？なんか怖いわよ？いっｔ――」

『イイカラセイザ、シヨウカ？ネッ』

「はい……」

さて、大反省会の開始としようか？

第４話～反省する生徒会～？（訂正）（後書き）

これからもよろしくお願いいたします

第４話～反省する生徒会～？（前書き）

１ヶ月位放置して、申し訳ありませんでした

第４話～反省する生徒会～？

Ｓｉｄｅ～詩音～

「いいですか、会長」

「は、はい……」

「過去の失敗を糧にしてこそ、我々は前へ進めるのです」

「そ、それ、私の名言――」

「だまらっしゃい！」

「ひぅ」

……どうも、絶賛激怒中の雨宮詩音です

何故か、僕じゃなく、鍵が会長さんの説教を始めちゃいました……

「かの偉人、聖徳太子は言いました。『人間、反省なくして月９出演はありえない』と」

「絶対言ってないと思うけど……」

「だまらっしゃい！」

「ひぃ」

「時代考証などどうでもいいんだ！要は、『反省しろ！』ってことなんですよ！」

おぉ……

あの鍵がまともに怒ってるよ……

雪でも降りそうだな

「そんなわけで、会長は反省すべきなのです！性的な意味でも！」

あ、あれ？

これって反省会だよね……

『ねぇ、鍵。性的な意味でもってどういうことかな？』

「あ……、いや、その、えーっと……」

『うん、まずは鍵が会長さんに手本を見せようか？』

『じゃあ、代わりに真冬ちゃんが会長さんの反省点を教えてあげて？』

「は、はい！」

『んじゃ、鍵は少しＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか？』

「いやだぁぁぁぁぁぁ！」

さて、どこら辺で処刑しようかな？

――しばらくは、音声だけでお楽しみ下さい――

「お、おい？そのグロテスクな物体は何ですか？」

『ああ、これはね、とあるピンク髪の知り合いから送られてきたクッキーだよ？』

「確かに、見た目はクッキーだけど、危険なオーラが……」

『ちなみに、その知り合いの料理で倒れた人間もなかなか多いよ？』

「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！」

『だが、断る！』

『ほらほら、女子の手料理だよ？』

「イタダキマス！」

ドサッ

『……さて、これは少し放っておくか』

「もう殺してぇー！そんなに私が会長であることに文句があるなら、もう首をはねればいいのよぉぉ――――！」

会長が何か叫んでるし、鍵は泣いてるし

『僕が生徒会室から離れている間に、一体何があったっていうんだ……？』

「おっ、やっと戻って来たな、詩音」

『あ、うん。ところで、今ってどんな状況なのさ？』

「いや、少し紅葉先輩が会長さんをいじめ過ぎてな……」

深夏は、頬を書きながら、困ったように呟いた

『なるほど……』

しかし、どうするかな……

ここで変に刺激すると少し面倒なことになりそうだな……

『とりあえず、放置すれば、鍵がなんとかするでしょ』

全て鍵に押し付けて、高みの見物としようかな

……不味い

会長さんを励まそうとした椎名姉妹は、余計に場を酷くしただけだったし……

もし、鍵が駄目だったら……

『知弦さん、恨みますよ……』

その時、鍵が一つ咳払いし、告げた

「会長は可愛い」

「……ふへ？」

「どんなに駄目人間でも、可愛いければ許されます。少なくとも俺、杉崎鍵にとっての会長の可愛らしさは、七千九百五十一個の欠点なんて補ってあまりあるどころか、大幅にプラスに傾くって話です」

……とても、鍵らしい励ましだね

「な、なによそれ。そんなの……結局、容姿だけってことじゃない……。私なんて……ただの嫌われ者なんじゃない……やっぱり」

しかし、会長さんはあまり回復しなかった……

「なにが不満だと言うんですか」

「え？」

『鍵の言う通りですよ、会長さん』

「詩音まで……」

「欠点が沢山あっても、それでも好きだと言って貰えることの、どこが悪いと言うんですか」

「杉崎……」

『さて、後は任せるよ？鍵』

「……おう！」

それだけ言って、僕は自分の席へ戻った

「……さて、話を戻しますか」

そう言って、鍵は再び会長さんの方を向いた

「俺はたまたま容姿って観点で語ってますけどね。他のメンバーだ

って同じですよ。それこそ、会長の欠点なんて、何千個という単位で皆思いついてしまいます。でも……誰か、一言でも会長のことが嫌いだなんて言った人間がいますか？」

「そ、それは……」

「じゃあ話を変えましょう。会長は……会長は俺のこと、嫌いですか？」

「え？そ、そんなの――」

『会長さん』

「な、何？」

『今回は、真面目に答えて下さい。大丈夫ですよ、鍵はこんな時にはふざけたりしませんから』

そう、微笑みながら言う

会長さんは少し困惑しているが、それでも鍵からそっぽを向きながらだが、しっかり答えてくれた

「き、嫌いじゃないわよ……別に」

その答えに、少しだけ微笑む

『ほら、会長さんっていつも鍵の悪口みたいなのを言ってるでしょ？なのに嫌いじゃないんでしょ。』

僕の言葉に、会長さんは？を頭に浮かべている

『僕が思うに、悪口の数は、それだけその人を見ているってことだと思うな』

『だってさ、本当に嫌いなら、その人を見なければいいんだから、悪口どころか、無視がいいとこだと思うよ？』

「会長」

「な、なによ。杉崎」

「俺から会長への感情は、『嫌いじゃない』よりもっと強い、『大好き』ですけどね。……そういう感情に、欠点だのなんだのって、関係ないんですよ。それは、皆同じです。俺と意味は違っても、皆、会長のこと『大好き』なのは間違いないですよ」

「杉崎……皆……」

『だからこそ、欠点が見えるんじゃないんですか？皆、好きだから、その人にもっとよくなって貰いたいからこそ、悪口や欠点が出るんじゃないんですかね？』

「だから会長。会長は自信持っていいと思いますよ？たくさん欠点あるのに、それでも皆に好かれるって、それは尋常じゃない才能ですよ。誇って下さい」

鍵のその言葉に、会長さんはグッと袖で涙を拭う

「しかし、意外ね」

知弦さんが僕に話しかけてきた

『？何がですか』

「いや、シー君って全部キー君に任せるって言ったから、もう関わらないと思ったから」

『ああ、それですか』

確かに、鍵に任せるとは言っているけどね

『強いて言うなら……』

「言うなら？」

少しだけ微笑みながら

『そうですね……。ただ、憧れの“正義の味方”ならこうするかなって思ったからですね』

知弦さんは、満足したように「そう…」とだけ言って、再び会長さんの方を見始めた

皆で会長さんを見守っていると、会長さんが顔をあげ、満面の笑みを見せた

「え、えへへ！や、やっぱりね！私は生粋の生徒会長なのよ！私ほど生徒会長に向いた人間は、そうはいないのよ！」

ダンッと椅子の上に立ち上がる。そうして、高笑い

どうやら、無事に復活したらしい

ふぅ。良かった良かった。これで一件落――

「あはははは！そうよね！私が会長に相応しくないわけないよね！やー、なにを血迷っていたんだかっ！だって人気投票よ、人気投票。私が一番人望あるってことじゃない！そうよ！知弦や杉崎が私の欠点を何千個とか言うのも、全部妬みってことよね！そうよそうよ！」

《ピキ、ピキ、ピキ、ピキ》

うざい……

まさか、ここまで変わるとは……

「あっはっは。そっかー。皆、私が大好きなのかぁー。やー、困ったなぁ。人気者は辛いよねー。普通に考えたら、欠点が何千個単位であるわけないもんねー。どうして、ただの妬み、僻みによる暴言だって気付かなかったんだろう。なんかごめんねー。真に受けちゃって。そうだよねー。私に悪いところなんて、これっぽっちもないものねー」

『……（プチッ）』

臨界点に達した

会長さん、少し調子に乗るのはよろしくないなぁぁぁぁぁぁ！

会長さんに対し、僕達は、同時に怒鳴りつける！

『そこに座りなさい！』

――その日の反省会は異例の深夜まで及び、最終的には、桜野くりむに、

「私は生徒会長として間違っておりました。今後は誠心誠意、生徒のために尽くさせて頂く所存でございます」

と号泣させながら言わせるまでに至った

しかし、翌日、生徒会メンバーは驚くべき光景を目にする

「過去を振り替えってばかりじゃ駄目！だって、時は前にしか進まないのだからッ！」

この言葉を聞いた生徒会メンバーの一人である雨宮詩音が再びキレたのは、いうまでもあるまい

Side out～詩音～

第４話～反省する生徒会～？（後書き）

～とある、電話内容～

もしもし、姫路さん？

詩音だけど、クッキーのことだけどさ、もしかしてまだ自分で味見したりしてないのかい？

……へぇー、まっ、これからはちゃんと味見とかはしよう？

ところで、そっちはどうだい？

ふーん、姫路さんに好きな人がねぇ？

頑張りなよ？応援してるからさ

それじゃ、また今度ね

……あっ、もうクッキーはいらないからね！

ブツッ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6790r/

生徒会の一存＋ａ

2011年10月7日23時48分発行